# 幼児保育者と教養

倉橋惣三

だれでも教養を缺いてはならない。幼児保育者にも同様である。しかも實際は案外それがなおざりにされてはいないだろうか。そして、相手が幼児だからということで、自他ともにいゝのがれたりする。とんでもない。相手が幼児であり、幼児教育だからこそ、わたしたちに特に教養が必要だといわなければならぬ。知識や技術を教える教育とちがつて、人間性と教養とだけをもつてしている教育だからである。

幼児保育者にかぎらず、一般に、われ〳〵教師に教養の乏しいのが、遺憾な事實ではあるまいか。教師は、その受持つ學科の知識に明かに、技術にたん能でなければならぬ。また教育のしかたに科學的準備と經驗的熟練をもたなければならぬ。しかし、それだけでは足りない。一般的教養に豐かでなければならぬということは、言つてみれば當然のことであるが、近頃、しきりに警告されていることである。そして、よき教師の資格として、よき教師の養成の要件として、一般教養の必要が强調されている。そして小學校、中學校の教師はもとより、專門的な學校の教師にも、その注意が促されている。

すべての教師は、その教養をそのまゝを持ち出して、授け與えるわけではない。教養は本來が、その人の内に籠り、それとなく、何ごとにも、いつとなく、いつでも、かおり高く、うるおい豐かに、にじみ出るだけのものである。教師の場合とて、その例外ではない。そして、ものゝ觀かたに、感じかたに、考えかたに、從つては、その時々の行動の上に、清さや、高さや、深さを與えるものである。さて、それが、教育の上にどんなに大切なことであろう。

幼児保育者は、わけても、その幼い相手と共に、共に觀、共に感じ、共に考え、共に行動することを以て、その教育の全面としているといつていゝ。してみれば、幼児保育者の教養如何は、その教育の全部の内容であり、本質を左右するものだといつていゝ。知識や技術を内容とする教育では、それだけでも、一應は教育しているといえるでもあろう。そうでない幼児教育では、幼いものゝ、ものゝ觀方、感じ方、考え方、またその行動に、清さや、高さや、深さを、だん〳〵に加えるほかに、教育をしているとはいえないのである。すなわち、教養なしに眞の幼児教育は出來ないともいえる。

幼兒と共にうたうために、音樂の技能は、それ程高くなくても濟むかも知れない。しかし、幼兒と共に聽く音樂の鑑賞力は高くなくてはなるまい。幼兒に繪を指導するに、畫家として、そんなに秀でていなくても出來るかも知れない。しかし、幼兒と共に觀る美術の鑑賞力は優れていなくてはなるまい。幼兒に語る言葉に、そんなに深いものはいるまい。しかし、文學を解し、自然を感ずる教養の深さは、決して幼兒の理解や感覺の程度にとゞまるものであつてはなるまい。幼兒に與える文化は、幼兒文化の限界内にあるものであるべきだろうが、幼兒教育者のもつ文化が、幼兒文化の限界内のものでなければならぬ論理はない。高く深い眞の人間文化でなければならない。幼兒文化は幼兒向きのものであつても、幼兒教育者自身の文化は、幼兒向きのものであつてはならない。又、それでこそ、幼兒向き文化が、眞の文化の裏づけをもつであろう。

教養は自分のためのものである。教師としてというものではない。しかし、低い教養、淺い教養、狹い教養を以て子どもに接することは、子どもを、低俗、淺薄、狹わいにすることにほかならない。教師としての、最も大きな責任といわなくてはなるまい。その反對に、輕く、平易に、共に遊んで呉れ、語つて呉れる教師によつて、識らず〳〵、高く深く廣い心に觸れさせられる子どもは幸福といわなければならない。

そして、教師の心を高く、深く、廣くするものは、教養のほかにないのである。

但、高く深く廣い教養を積むことによつて、幼兒教育の低さ、淺さ、狹さをいとうようになつたら困る。困るよりも、それは、まだ眞の教養になつていないのでもあろう。眞の教養は、決して、そんな淺はかなものでも、高慢なものでもない筈だからである。

それどころか、高く深い教養は、幼兒の生活をも、高く深く感じさせずにいないだろう。教育しよう、教育してやろうとのみ、その低さ淺さに卽していては、それ以上のものを幼兒に感じることが出來ない。卽すべきところは卽しつゝも、教養を以て幼兒を感ずるもののみが、その幼兒教育に高さと深さとを感じ得させられるのである。幼兒教育を、その低さ淺さに卽しつゝ、高く深いものに感じていて呉れる教師こそ幼兒のために、眞に貴い教師である。すなわち、教養の乏しい教師は、樂しい教師、お世話になる教師ではあつても、貴い教師ではないかも知れない。但またいう、その貴さは、教師自身の意識することではない。教師自身は、幼兒を樂しくし、幼兒を世話することに、身も忘れている。その姿もまた、たゞそれだけの平凡の人であつて、教養による貴い幼兒保育者などとは、そと目に見えないであろう。眞の教養は、自分では意識しないほど、その人の身についているものだからである。高い教養を以て幼兒と共に低くいる人、その人こそ、眞の幼兒保育者である。